

荒川洋治 詩集『娼婦論』

— 消滅と再生のことば —

はじめに

詩集『娼婦論』（一九七一年九月 檸檬屋）は、七編の詩で構成された荒川洋治の第一詩集である。荒川洋治はまだ二四歳の学生で、詩集『娼婦論』を早稲田大学文芸科の卒業論文として提出し、平岡篤頼¹の推薦で同学の小野梓芸術賞を受賞した。平岡篤頼はロブ・グリエ『消しゴム』（一九五三）、ミッシェル・ビュートル『心変わり』（一九五七）、ラン・バルト『零度のエクリチュール』（一九五四）など小説や評論を翻訳して、ヌーボ・ロマンをはやくから日本に紹介した仏文学者の一人である。

詩集『娼婦論』は詩が避けることのできない隠喩を駆使している。ことばの表現は、意味と切り離すことはできない。意味はことばの関係で定まる。隠喩は言語の本質的なありようと関わっている。古くは隠喩をアリストテレスは『詩学』で語の転用としていた。² 隠喩のことばは二重の意味をもっており、文脈によってその色合いを変化させて行く。類似性、近接性に置かれた二つの語に意味の響き合いが生じる。詩集『娼婦論』と言う標題である。標題からは娼婦の是非を問う論のようである。七編の詩は、女性や娼婦について述べている。然し、

吉田 敬

ここでは、「娼婦」は肉体を売る女性を指す言葉ではない。荒川洋治は「詩は女でなければならぬ。」（『詩論のバリエーション』一九八九年一月 學藝書林）で、詩が女性的であることを主張している。詩集『娼婦論』の、君、きみ、娼婦、姉、こいびと、あなた、妖婦、おんな等の女性を指したことばは詩と解釈される。また、「論」と言う語も詩集としては奇妙である。わたくしたちは、現実的な成分を刷新的に産出する見解を論と呼んでいる。詩集『娼婦論』を卒業論文にした所為かもしれない。また、物語を拒否して、創作行為の根拠を問う批評行為と作品とが一体化された小説をヌーボ・ロマンと称するが、その影響かもしれない。いままで「く論」という標題のついた詩集はない。詩集『娼婦論』は、詩の評論を語った詩集である。

本稿の副題を、「消滅と再生のことば」とした。詩の何が消滅したのか、作者はどのように詩を再生させようとしているのかを考える。詩集『娼婦論』は多くの隠喩が交錯しているため、作品の真意を読み取りにくい。だが、作者が考えている詩の再生のことばは、すでに作品のなかにあり、詩を解釈して詩集『娼婦論』の特性を浮き彫りにした時に現れるのではないか。隠喩は生きたことばなので、慣用的になつては意味は通じるが面白さが失われる。また、隠喩をどう解くかは

読者の解釈にある。すでに詩集『娼婦論』は論としてまとまっているので順を追って述べていく。詩の根拠、隠喩の拡大と深みを考えるのである。

以下、本稿では詩集『娼婦論』の隠喩に注目し、詩のことばの消滅と再生について考察する。

一 詩の根拠と隠喩

「キルギス錐情」は、詩集『娼婦論』の冒頭に置かれた作品である。六連から成り前半は散文体で、後半は行分け文になっている。また、二つの空間で構成されており、ひとつは東欧のコトラスの市^{まち}であり、あとひとつは中央アジアのキルギスである。

ヴォログダ州ヴェリキイ・ウスチュグ市付近でスホナ川(スコナ川)とユグ川が合流して北ドビナ川となり、アルハンゲリスク州のコトラスあたりを通り、ノヴォドヴィンスク、セヴェロドヴィンスクを、大きくうねりながら流れて白海に注ぎバレンツ海に広がる。だが、物語は川を遡上して林を抜け森に向かう。コトラスはロシア最大の製紙工場があり、アルハンゲリスク州は林業木材加工業が盛んで全ロシアの木材生産の三五%を占めている。コトラスの市から、ことばの訛りは強まり、歴史に登場することもない奥まった森林に入ると、それでも人は住んでいる。ウラル山脈の高峰を眺めながら樵夫が木を切り倒している。倒れ木は枝葉に風を受けて揺れながら陽の沈む西の方向に轟音とともに沈み込んでいく。たまたま通り過ぎるひとは陽に焼けて赤らんだ顔をしている。出会うということは通り過ぎることであり、時

が過ぎることである。地の底で、裸形の死者の骨は棺から夜の景色を見る。死者の怒りのただよう山巔^{かみもと}付近で、ひとは通り過ぎるように死んでいく。もはや、樹を切り倒しても樵夫は死んでいるので口笛を聞くことはできない。見知らぬ鳥を撃ち落としても狩人は死んでしまっている。帰路を見とどけることはできない。すべては午後の死の世界に匿されるのである。

「キルギス錐情」はコトラスから一転して、東南の中央アジアのキルギスに場を移す。キルギスは、中央アジアのスイスといわれる雄大な自然に恵まれた高原である。万年氷のイシククル湖の向かい側に天山山脈がある。

キルギスの草原に立つひとよ
君のありかは美しくとも

(「キルギス錐情」五連一行目〜二行目)

万年雪を頂いた山々や美しい湖のある高地の景色を語り始めるが、「単に／君の死は高低だ」(二四行目〜一五行目)と中断する。コトラスのひとの死も、キルギスに住むひとの死も単に地理的な高低の違いである。地図を見ながら幻視していた世界から「わたし」の意識に還る。

わたしは君を
地図のうえに視ている
ときおりわたしののひらに

錐きりのように夕日が落ち

すべてがたしかめられるだけだ

(「キルギス鍾情」六連一行目)

「わたし」が地図のうえに見ている「君」は、娼婦であり、女性であり、詩である。さしだした掌に痛く夕陽が落ちかかる情景を描いて、「すべてがたしかめられるだけだ」(六連五行目)と、浮遊する意識から「わたし」の存在を確かめて詩を認識する。異国の大自然の中で素朴な生死を幻視し、夕陽を痛く掌に受けるのである。

詩集『娼婦論』が檸檬屋から刊行されたのは一九七一年九月である。

ジャン＝ポール・サルトルの実存主義は、日本で六〇年代後半から七〇年代初頭にかけてブームを巻き起こした。サルトルの実存主義は、ハイデガーの実存哲学が導き出したように「実存は本質に先立つ」とする立場であり、認識する人がいるから世界は存在し、人間は自由であるとする。実存の根拠を説いたのはデカルトの『方法序説』(二六

三七)である。デカルトは「Je pense, donc je suis」(「方法序説」理性を

よく導き、もろもろの学問において真理を求めするための序説(第四部)を、

あえて当時誰でもが読めるフランス語で書いたが、メルセンヌ神父がラテン語に訳した。「Cogito ergo sum」、「我思う、ゆえに我あり」という、実存の本質を述べる言説である。スコラ哲学と懐疑主義の間に立って、「誰もこの世界(夢)の外からこの世界を解釈する見方の真理性を原理的に証明できない。しかし、それにもかかわらず、一切を疑わしいとみなす考えに対抗する原理を、われわれは世界(夢)の内側に持っている」という。「キルギス鍾情」冒頭に「方法の午後、ひ

とは、視えるものを視ることはできない。」という語りがある。この言説は幻視する世界が実存とする方法を語っている。たとえ、地図上の地名から幻視する光景であれ、古い形の詩が崩壊することは真実である。「わたしの手のひらに／錐のように夕日が落ち」することで存在は確かめられるのである。「ひと」は、「わたし」の幻視するものを視ることはできない。詩の実存を語った提言である。

「諸島論」は、詩集『娼婦論』の二番目に置かれた詩である。一連は次のように始まる。

みやびを不順にしずめ

しぐれて 在る

諸島

パラレルに名をそりおとし

日暮れても ととのえて在ることの

さぶしさ

(「諸島論」一連)

諸島は北緯七四度から八一度、東経一〇度から三五度にあるスバルバル諸島である。「諸島論」の諸島は、極北の寒冷の場所にあることと、諸島全体の形状が楕円形の半分であることを語っている。それを「氷海にそばだつつちふまず」(四連一行目)と表現している。つちふまずはひとの足裏の窪んだ部分である。また、「パラレルに名をそり落とし」(二連四行目)とあるが、パラレルとは平行のことである。スピッツベルゲン島、北東島、バレンツ島、エッジ島などで成り立つス

パールバル諸島は、全体の形が楕円形を二つに切りおとした片面の形状を示している。「諸島論」は、後半の語りのようすが異なっている。後半は次のように言う。

まといつくわが殺意は、振子の渋い伏匿にこごえ、調べよくみちのくをさまよ／う。指の数を憂えながら石女うますめのやさしさで胎児を否決するとき、

なお青く 諸島は在る

わたしはにぎわしくかきくもり

あざみのように

経験を急ぐ

(「諸島論」五連く七連)

振り子のようにゆれる殺意は、隠されたまま凍結されて、しらべよくみちのくをさまよ。女性が生まれ出る子の不遇を案じ、指を数えて憂いを感じ、胎児を否決するのは、詩の音数を数えて語調を整えるのを拒否することを指す。詩の雅みやびを沈め、音数律を否定したことに戸惑う様子を擬人化して語っている。

「過度の叙事を空冷し、」(二連一行目)と、過ぎた叙事を凍結させて差し控える。「絹のさし木を嗤うもの、」(二連一行目)と、雅みやびをさし木のように増殖させようとする馬鹿げた行為を嘲笑する。一連は諸島が置かれた状況を説明する情景描写である。二連も「過度の叙事を

空冷し、絹のさし木を嗤うもの、諸島。」と、諸島を説明している。だが、みやび、行き過ぎた叙事、相似という概念は詩を説明することばである。つまり、「諸島」は極北に存在する場所を説明しており、詩のあり方を述べている。また、あざみは濃い紫の花をつけ、葉には深い切れ込みがあり鋭い棘がある。現代詩は連と連の間に空白があり、鋭い棘ともいえる風刺を含み、美しい花を咲かせる。あざみは現代詩をほのめかしている。諸島やあざみは、現代詩を指す比喩である。

詩集『娼婦論』は詩について語っている。「雅語心中」「異本の坂」「娼婦論」などは、日本で詩の状況を述べているが、他の四編は日本から遠く離れた外国を場に行っている。標題に表れた固有名詞と詩の隠喩の根拠を簡条書きにすると次のようになる。

① 「キルギス鍾情」のキルギスは、中央アジアの独立国家共同体(CIS)の加盟国となっているキルギス共和国である。国土全体の四〇パーセントが標高三〇〇〇メートルを超える山国である。一方、ロシア連邦アルハンゲリ斯克州南部のコトラスは低地で、ウラル山脈最高峰のナロードナヤ山でも一八九五メートルしかない。キルギスとコトラスの標高の高低差は明らかである。

② 「諸島論」の場は、北極圏のバレンツ海にあるノルウェーの属領スパールバル諸島である。北極の海に浮かぶ大小の島で形成された諸島は、ランベルト図法で記された地図では楕円形を半分にした形状である。形状と極北に存立する諸島を詩にしたのが「諸島論」である。

③ 「ソフィア補填」は、ブルガリアのソフィアであり、街の古さがあ

り、そこから引き出されるジョングルールのイメージがある。

④「タシケント昂情」のタシケントは、ウズベキスタン北東部に位置し、晴れ渡った石の景色、かつて絹街道シルクロードで栄えた市をイメージする。

このように地名は地理、歴史、文化の意味を含んでおり、それ自体隠喩になったり、隠喩に重要な役割を担ったりする。

吉本隆明は一九八二年に『マスイメージ論』で、荒川洋治の詩集『水駅』の「見附のみどりに」を引用して「この詩人は多分若い現代詩の暗喩の意味をかえた最初の、最大の詩人である」と記している。隠喩は意味の相似、類比に基づいて、ある語を他の語に代替して誇張する表現と考えられている。隠喩は作者の想像力とともに深化、拡張する。

二 詩の韻律と雅語

「ソフィア補填」は、詩集『娼婦論』の三番目に置かれている。

「鎮めるものはなにひとつない。」（二連二行目）、「わたしは鎮めるものも、鎮まるものもたない。」（五連二行目）、「わたしは鎮めるもので」（七連一行目）と、ソフィアの街を語る。歴史に生きる街で現代詩とは無縁なことを暗示している。幻想のジプシーはただれた礼節を着込んだように慇懃な態度で接する。赤茶けた路地があり、世話好きな人々がいる。狼の遠吠えと羊の鈴の音がけだるく夜の街に響く。夕暮れに人の影が浮かぶ。死を目前にした老婆たちは関節を患っていて腰で歩行を促している。ソフィアの街は、現実がすべて闇に包まれたよ

うで過去と変わりはない。だから、ひとはだれかと似ている。歴史の岸辺に落城して銃眼だけが残っている。何も書かれていない白い批評がある。現在でもジョングルールに似た格好でギターを奏でる大道芸人がいる。「ソフィア補填」は、「そこをゆくくちびる紅きジョングルールよ、その風琴は枯れたが、ふりむくきみの安寧はあたらしい。」（五連二行目）と、過去と変わることがないことを語っている。城から城を放浪し、聖者伝や武勲詩を大道で歌ったジョングルールである。南バルカンの古い街の片隅でくすんだ石窓の女に手を振ると女は冷たく鑑戸を降ろす。「わたし」は地図から想像の世界を抜けていたのだが、現実には転げ落ちる。ときおり、狼が、家畜のように間違えて街を走ったりする。叙事詩は今も歌われているが、あまりにも古い形で現代的に補填するものはない。

「タシケント昂情」は、詩集『娼婦論』の四番目に置かれている。タシケントの高原は辺り一面が石の世界である。絹街道シルクロードから歓喜して迷い込んだ人々の幻影が景色を形成しているように見える。隙間に青い空がある。白い石は遺跡であり、歴史の誤謬をいとめている。ここを通る人々は遺跡の比喩となり、比喩が過去か現在なのかわからなくなる。青と白の高原はあざやかに不遜を表白し、風はその吹路をきめて吹きかかるばかりである。娼婦は妖しく横たわるが「わたし」はひとりである。中央アジアのタシケントは絹街道シルクロードから形成された遺跡の街である。黒衣の娼婦は「あの青い空も遺跡よ」という。タシケントは、街そのものが比喩である。そこに詩の本質がある。

五番目に置かれた「雅語心中」の物語は、「わたし」の姉の死になぞらえて詩の韻律、雅語の消滅を語る。

かえりみればここに、ぶあつい葬列から逃れてた死者のひとなつ
の避暑のねがめを蒼い砥石に研ぎ、棄てきれぬ雅語にすずしく
しをとおす、わたしの胸の血櫃がある。

(「雅語心中」四連)

「ぶあつい葬列」は、詩が消滅に向かう行進である。四連の語りは、詩が擬人的に行列から離れて束の間の憩いを求める場面を描き出している。「蒼い砥石に研ぎ」(四連二行目)は、まだ若く未熟な詩の技法を高めることである。捨てきれない雅語をいとおしむ心を、「棄てきれぬ雅語にすずしくしをとおす」(四連二行目)と表現している。「胸の血櫃」(四連二行目)という表現は、陰に陽に受け継いできたこれまでの詩の心である。雅語との離別をこのように省みている。これまでの詩とは異なる現代詩を確立するためには、古いものと決別しなければならぬ。雅語は作者のなかに存在したものである。自己の内なるものを参照することによって詩の雅語を認知し得るのである。

三 消滅と再生の言語

六番目に置かれた「異本の坂」は、「キルギス雑情」の娼婦と樵夫の「しようふ」のように、鹿と詩歌が音感的に同一である前提で語り始める。詩歌は「しいか」と普通読むが、「しか」の慣用読みである。だが、「異本の坂」の場合は、鹿と詩歌ばかりでなく、娼婦、異本という語とも繋いでいる。異本を校まじりあ合し、誤謬・脱落を検討した

ものが定本である。鹿の背の斑文を「まだら」と呼んでいる。「異本の坂」の詩歌、鹿、まだら、そしてこの詩集のテーマである娼婦は関係づけられている。「異本の坂」の冒頭は次のように始まる。

総身をふさぐまだらは日日に高所を貢がせ、鏡に映る自律を割る。まだらは無風の註疏を担い、肌色の樹海をあけしめする。
予望は寒い迂路を嘸み、鹿はしばし、紫の保持をゆるめる。

(「異本の坂」一連一行目)

複数の対象を暗示する言辞であるが、いずれも詩歌のことを語っている。鹿は、「総身をふさぐまだら」(一連一行目)があり、「日日に高所」(二連一行目)に赴く。娼婦は、「日日に高所を貢がせ、鏡に映る自律を割」(二連一行目)り、「肌色の樹海をあけしめ」(二連二行目)して男性に尽くす。また、「紫の保持をゆるめる」(二連三行目)作者は紫を良妻賢母の色としている。)と、娼婦は矜持を解く。異本は「無風の註疏を担い」(二連二行目)、「予望は寒い迂路を嘸み、」(一連二行目)と、あまり註疏が添えられていない異本は寒く曲がって消えている。鹿と詩歌と娼婦、また、鹿の背の「まだら」の観念を混交させて語る。詩文は形式を超えた言語活動で、詩人独自の表現で語る。「異本の坂」の三連から一〇連は、和歌の定本と異本の関係を語っている。

「異本の坂をおんが駆ける。鹿に肖てまだらに死に。」

(「異本の坂」一連)

異本は鹿の斑紋のように誤謬や脱落があり、不完全な状態である。

「異本の坂」は、異本が定本の前に消滅する状況を暗示している。

最後に置かれた七番目の「娼婦論」は、「私」と娼婦との性的な場面が描かれている。冒頭で「まず私服の蛇を遠ざける」（一連一行目）と、断っており、「私」の欲望とは別に、詩の物語を想定したものであることを暗示している。「私」と娼婦の性の営みは進行する。

まず私服の蛇を遠ざける

みぎれいな乞食^{かたい}を屈ませ

ひなびた必須をひねり

かじかんだ呼鈴をむしり

雪譜も埋まる雪のなか

ひえるくるぶしを谷水にすぐ

あなた

（娼婦論）二連一行く七行

「娼婦論」は詩の音韻を否定する言説である。「あなた」と女が「私」を呼んだものではなく、「私」が女、「みぎれいな乞食^{かたい}」、形の整った詩を指した言葉である。「呼鈴」、「雪譜」は韻である。「娼婦論」はそのほかに、娼婦の嬌声は韻、「死の呼び水」は、抒情性の消滅、「男斧のほおばりに疲れ」は、詩の形式の疲労の比喩と見ることができさる。

こわれかけた蛇が

はじめて意志を懐胎し

時の落丁にあたる

その夕闇に連座し

にじますは虹と訣れ

絹は逝く

（娼婦論）五連一行く六行

消滅しかけた詩が甲所を得て蘇生する。「にじますは虹と訣れ／絹は逝く」（五連五行目）と、雅語で囲まれたこれまでの詩のあり方は死滅する。「娼婦論」は男女の交合に重ねて、詩の韻律、雅と決別する物語である。詩が様式化され、想像力を失ったとき消滅する。詩と散文の相違である。

おわりに

言語は使用されなくなれば消滅する。隠喩という比喩表現は、慣用化されれば意味は通じるが、読者の関心は薄れていく。詩の隠喩はその微妙なところであり、詩集『娼婦論』はその上に成り立っていると見える。詩集『娼婦論』はさまざまな地所で語っているが、すべて詩について語っている。詩集『娼婦論』は、詩を娼婦に見たてて語った詩論集である。

詩は解釈するものではなく、感じるものであるとする考え方があつた。だが、荒川洋治の詩は考えざるを得ない。詩の意味をくみとりにくい詩集『娼婦論』は、深さと奥行きを感じさせるといふ印象をもつ。

詩集「娼婦論」は、和歌から引き継いだ雅と韻律の排除を語る物語である。荒川の詩集『娼婦論』の帯には「激越の第一詩集」とある。感情がたかぶった荒々しさを感じさせることばである。荒川は、八年後の一九七九年九月に気争社から、詩集『あたらしいぞわたしは』と言う風変わりな標題の詩集を出している。冒頭の「梅を支える」で語り手の「わたし」は、「来る月はあたらしい落葉とのぶつかり合いだ／この分では避けられぬ、このほうの／生き血のあらため／あたらしいぞわたしは」と結んでいる。詩集『あたらしいぞわたしは』は、情景や日常生活の状況を語っているが、常に真剣で斬新な戦いに暮れる現代詩作家の心を述べている。これまでの詩のあり方と対決し、消滅させる意味を持っている。荒川の抒情詩との対決は、古い自我から脱皮して、新しい自我を身につける実践のことばである。

詩集『娼婦論』は、物語を断片化して読者の想像力に委ねる傾向にある。固有名詞の多用、惹句的で過激な表現、比喻の重層化、さらに、複数の素材、心象を同時に語っている。また、統語性からはみ出す文体がある。リズムは韻律ではなく語調の長短を踏み分けるものである。拍子や反復のような機械的なものではなく、ゆらぎを伴ったリズムである。「詩はけつきよく喉越しのよさ。流しこみの気楽さ……」という平岡篤頼のことばがある。少なくとも詩集『娼婦論』には、ごつごつとした硬質さは見られない。喉越しよく流しこんで、「あれはどうだったのだろうか？」と、考えさせ再読させるものがある。

注

(1) 平岡篤頼は荒川洋治にフランス語を教えており、「早稲田文学」第八次(1976-1997)の主宰者であった。詩集『娼婦論』は、一九七二年小野梓

芸術賞を受賞している。小野梓は大隈重信を助けて早稲田大学の前身である東京専門学校創設に心血を注いだ人物である。小野梓賞は、学術、芸術、スポーツの三部門等において、それぞれ優れた成績をおさめ、模範となるべき学生に対して贈られる賞である。

(2) アリストテレスの『詩学』(『アリストテレス 世界の名著 8』編集田中美知太郎 一九七九年三月 中央公論社)で、「転用」(比喻)というのは、あるのものと対して、本来は別のものを名指す語を適用することであり、「と、語の転用、つまり隠喩を語っている。

(3) ジョングルールの、中世初期聖者伝、武勲詩を歌い、城から城へ渡る楽士(大道芸人、旅芸人)である。(詩人、創作家であるトルバドゥールとジョングルールの身分の違いがあつたりするが、その区別はあいまいである。)

参考図書

『荒川洋治全詩集』(著者 荒川洋治 二〇〇一年六月 思潮社)
『言葉と意味を考える(II)』(著者 赤羽研三 一九九八年一月 夏目書房)
『デカルト・世界の名著27』(編集 野田又夫 一九七八年八月 中央公論社)

(よしだ たかし)